



明治大学リバティホールにおける基調講演

## 二宮尊徳思想学会 第七回(明治大学)大会開催

二宮尊徳思想学会第7回大会が、平成28年8月24日、25日の2日間、明治大学リバティタワーのホールと112大教室において開催されました。中国、韓国など海外から47名の参加者を迎え、初日から200名余の出席者を得て2日間盛況裏に終始しました。今大会のテーマは『「地域活成」と報徳—近世・近現代の諸相と課題—』です。早稲田大学名誉教授深谷克己氏と中国社会科学院世界史研究所教授湯重南氏の基調講演に続き、日中合わせて25名の方々による、歴史学、社会学、民俗学及び報徳実践活動の各分野からの多彩な研究が報告され、最後は「近世の遺産を近現代にいかにつなぐか」と題するシンポジウムで終了しました。



### 【開会式】 地域と報徳の活性化に向けて

開会式と基調講演は明治大学リバティホールで行われました。落合弘樹明治大学教授の開会の辞、来賓と学会役員紹介に続いて、開催地明治大学を代表して石川日出志文学部長が歓迎の挨拶に立ち、これまであまり知られてこなかった、明治大学における報徳研究の機縁と交流についての紹介がありました。次いで二宮尊徳思想学会並松信久会長の挨拶の後、来賓の大日本報徳社榛村純一社長が祝辞の中で、「報徳」は日本遺産として継承すべきではないかと提言されました。また福田昭夫衆議院議員、松沢成文参議院議員、神山洋介衆議院議員から、それぞれの立場で報徳の活性化に期待する祝辞があり、開会式を終了しました。

### 【基調講演】

#### 「アジア儒教文化圏」と

#### 「日中交流」における「報徳」

基調講演は日本側を代表して、早稲田大学名誉教授深谷克己先生が「東アジア法文明圏の中の報徳仕法・報徳思想」と題し、東アジアに広範に及んだ儒教文化圏の土台の上に、尊徳が現実の社会対応の中で会得した思想、仕法が「報徳」という文言で形成されてきたとして、国際的な文化交流の視点で報徳の歴史的位置付けを明らかにされました。また、中国側を代表して中国社会科学院世界史研究所教授の湯重南先生は、「報徳思想に関する一人の中国人日本史専門家の浅識なる認識」と題し、近代史におけ



基調講演：深谷克己先生



基調講演：湯重南先生

る日中韓の不幸な時代の、軍国主義に利用された負のイメージを払拭し、東洋の伝統文化と日本の民族文化の特色を生かした報徳を、これからは世界の新文化の構成要素として広めていきたいと述べられました。

### 【今回発表の特徴】 報徳の実践と実例、地域活成と報徳の活用、近世から近代へ

報徳は生活文化のあらゆる面に深くかかわる要素が多いため、これまでの歴史学のほかに社会学、民俗学、さらには報徳実践の現場からの報告も研究の対象にすべきであろうとする意見を受けて、今回は新たな分野からの参加を呼びかけた結果、多彩な広がりが見られました。報徳実践の現場の報告として、静岡県御殿場市の勝又幸宏氏の「竈報徳社のあゆみ」、北海道豊頃町の佐藤信勝氏による牛首別の報徳開拓の事績「二宮尊親の足跡を辿る」、新たな報徳活用をめざす報徳二宮神社宮司の「現代の地方創生に必要な報徳の教えについて」など。社会改革的な面からは露木順一氏の「現代日本の地方創生と報徳仕法」、池上洋通氏の「「地方創生」政策と地方自治の本質的転換の展望」による問題指摘と提言が、また民俗学的な視点からは今井秀和氏の「キンジロウと金太郎～近世、近代、それぞれの理想の少年像～」などがありました。また歴史学的な考察としては、早田旅人氏の「報徳仕法における領主の再分配論」、坂井飛鳥氏の「明治期の報徳社の救済的貸付事業について」見城梯二氏の「大正期の報徳思想と「日蓮主義」」等々、このほか興味深い多くの報告が発表されました。

竈報徳社報告：  
勝又幸宏さん



## 【中国の研究者からの発表】

中国の研究者からは従来からの課題である、現代の社会情勢に適応させる報徳思想の応用についての検討や、徳についての儒学と報徳の解釈の異同等が中心となり、華東理工大学教授俞慰剛氏の「二宮尊徳の土地思想からの啓示」、曲阜師範大学宋曉凱准教授の「中国現代社会における報徳思想の意義」、清華大学教授馮峰氏の「二宮尊徳に於ける『徳』と儒学の『徳』の異同について」などの発表がありました。また清華大学陳愛陽准教授からの報告「清朝末期農業専門誌の発行と中国における二宮尊徳思想の伝来」では、日中戦争以前の清朝末期、近代化の五四運動時期の農業専門誌において、二宮尊徳の人と業績についての、連載記事による紹介がすでにはじまっていたという、最新の調査が注目されました。



研究報告6グループの発表者



シンポジウム司会の  
鷲山恭彦先生

であろう》とする提言を受けました。

元学芸大学学長の鷲山恭彦名誉教授の司会のもとに、深谷克己先生、大藤修両先生にこれまで報徳の近代社会における様々な問題の指摘と、その対処のあり方についての意見を求め、さらに参加者からの質疑も受け、活発な意見交換がおこなわれました。

## 【シンポジウム】

### 一近世の遺産を近現代にいかにつなぐかー

最後に、報徳の近現代への継承という明治時代から今日に至るまで、度々議論の対象とされてきた課題について、現在の視点から再検討としてのシンポジウムが行われました。冒頭、東北大学名誉教授大藤先生より「尊徳の思想と仕法を考える上でのポイント」と題する講演があり、《明治維新後、尊徳の思想の活用を意図した政治体制によって、尊徳が目的とした安民よりも、自助努力、相互扶助、一致協力などによる国家奉仕を優先する方向に変質させられたという経緯がある。そのことへの反省の立て、正しい報徳を正しく理解し、継承していくべき



シンポジウム提言  
大藤修先生

## 【大会後のバス見学】 愛郷報徳社訪問

大会終了後、前例に沿って有志希望者によるバス見学ツアーが催され、大型バス一台約50名の参加者がありました。今回は、大会テーマに関連して、地域活成の参考事例の一つとして、御殿場市愛郷報徳社を訪問しました。そこで報徳社こぞでの歓迎を受け、報徳社が報徳仕法によって建設し、市民に提供している会館やスポーツ施設を見学すると共に、これらがすべて報徳資金によって整備され、報徳社社員の奉仕によって運営されているという説明を受けました。

御殿場愛郷報徳社体育館で説明を受ける訪問団



## 平成28年度の企画展「報徳思想を書く」(第二回昴書道会選抜展) 開催予告

本年度の博物館企画展は、小田原市の昴書道会による「報徳思想を書く」と題する書道展となります。11月17日(木)から12月15日(木)まで、本館地下の特別展示室において開催されます。小学生も参加して、報徳の教えや標語、二宮尊徳翁の道歌など六十数点です。報徳標語や道歌は、これまでもよく書道の題材とされてきましたが、これほどまった書道展は初めてのこと。今回は同書道会が尊徳生誕160年を記念して、小田原飛鳥画廊で6日間披露したものを引き継いだものです。

## 報徳の広場

### 「中国孝徳連誼会」来館・交流

本年5月18日(水)、報徳博物館は中国の道徳文化振興団体「中国孝徳文化連誼会」一行13名を迎え、文化交流会を行いました。同会は、中国伝説の「三皇五帝」の内、孝行を尽したことで知られる舜の誕生地・浙江省上虞市を窓口とし、孝徳思想を中国伝統文化の内、最重要として、その発揚と社会の調和、民間文化交流、世界平和事業をすすめています。今回の交流は、二宮尊徳思想学会を通じて親交のあった中国社会科学院教授の湯重南先生が、同会の要請を受けて報徳博物館を紹介されたことにより、ます。

交流会には(公財)報徳福運社の役員や敬神婦人会を中心に40名が参加して、意見交換、書画の受贈と実演、会食を通じて親交を深めました。書画の実演では、日本側の書家も参加して、日中共通の伝統文化による親密な触れ合いに参加者全員が共感し、国際交流が深められました。



中国孝徳会から、  
交流の記念品を受ける  
草山理事長(中央)

### 博物館留学研究員生 郭勇さん帰国

本年2月28日に報徳博物館研究員生として来日した、大連民俗学院講師郭勇さんが6か月の研究期間を終えて8月27日に帰国しました。公益財団体制になってから2人目の留学生ですが、すでに5年前の平成23年にも半年間の留学経験があります。その時は来日早々東北地震に遭遇、被災地訪問の体験もし



留学研修を終えた郭勇さん

しました。今回は勉学の傍ら、博物館の「中国知ろう会」では3回(2/28「中国の色彩文化」、3/25『阿Q正伝』、7/24「中国人の日本留学事情」)の講師を務め、8月の国際二宮尊徳思想学会第7大会においては、事務

局スタッフの一員として、主に中国からの参加者の案内と世話に活躍されました。今後の研究成果に期待したいと思います。

### ハンサム金次郎シリーズ ③ 「負薪読書」金次郎像の初登場

おなじみの「負薪読書」少年金次郎は、明治24(1891)年博物館刊行の幸田露伴著「二宮尊徳翁伝」の、木版多色刷りの挿絵で初めて登場しました。上品な顔立ちスマートな歩行姿、この格調高い原画を描いた人は、狩野派の日本画家小林永興です。



左) 幸田露伴『二宮尊徳翁伝』の挿絵負薪読書の金次郎像  
右) 中国伝来の伝統画題 大岡春卜筆「朱買臣図」  
(和漢名筆画本手鑑)の負薪読書の姿



富田高慶の『報徳記』の「採薪ノ往返ニモ大学ノ書ヲ懷ニシテ、途中歩ミナカラコレヲ誦シ〜」の姿を描いたものです。この図柄のものは、J.バンヤンの『天路历程』の挿絵ではないかとする説がありましたが、その後の研究(岩井茂樹著『日本人の肖像 二宮金次郎』平成22年 角川叢書)によると、それは狩野派伝来の題材『朱買臣図』の応用であった可能性が高いようです。朱買臣は中国前漢時代の武帝の臣で、出世以前は薪を売って読書三昧の生活をしたとされる人です。薪を担ぎ読書するその姿は「寒山拾得」と共に、中国伝来の伝統絵画のモチーフとされてきたものです。その姿は金次郎の負薪読書図によく似ています。明治43年には明治天皇の表御座所で岡崎雪声作の「負薪読書」金次郎の銅像が愛賞されました。その頃巷では、商品宣伝用の引札や富山薬売の景品版画にも「負薪読書」金次郎像が多く用いられ、一般になじまれていました。このようなことが、後の全国的な規模で小学校校庭に登場する「負薪読書」金次郎像の、普及の導因になったと考えられます。

発行 公益財団法人報徳福運社

報徳博物館

〒250-0013 小田原市南町1-5-72

電話0465(23)1151・振替00230-6-49044